第７回高知県社会教育委員会（平成 31 年４月１日～平成 33 年３月 31 日任期）会議概要

令和３年２月 18 日（木）9:30～11:30
心の教育センター研修室
出席委員（岡西博文、時久惠子
竹中利文、森岡千晴、
川田米實、吉冨慎作、
廣末ゆか、清國祐二）

１　開会（9:30～9:40）
高知県社会教育副委員長挨拶

２　内容（9:40～11:20）
【高知県社会教育委員会提言において、事業化した取組についての報告】
報告者①：眞鍋大輔氏（ＮＰＯ法人ＧＩＦＴ事務局長）
報告者②：吉冨慎作氏（ＮＰＯ法人土佐山アカデミー事務局長）
報告者③：森岡千晴氏（高知県青年団協議会会長）

（副委員長）
委員長不在のため、代理で進行役を務める。
前回（第６回）には、教育委員会に提言を提出するとともに、教育委員と社会教育委員とで意見交換を行った。
今回は、高知県社会教育委員提言を受けて事業化した取組について、３名からの報告を予定している。まずはＮＰＯ法人ＧＩＦＴの取組について、ご報告いただく。

（ＮＰＯ法人ＧＩＦＴ眞鍋氏）
自然体験型事業として、１泊２日のサマーキャンプを実施した。未就学児１名、小学生 18 名、中学生８名、高校生２名、大学生 13 名が参加。
子どもたちの居場所として運営している「えいや家」の取組は、開催場所が老人ホームということもあり、新型コロナウイルス感染症対策のため、令和２年３月から中止せざるを得ない状況が続いている。利用している子どもたちからは再開を望む声も多く、なんとかして子どもたちに学びの機会を提供することができないかを検討していたこともあり、補助金を利用した宿泊体験事業を実施することにした。
企画から実施まで、子どもたちが計画し、大人は場を整えることに終始した。カレー作りひとつとってみても、普段と違う環境で自分たちが主体となって行動することは、非常に楽しかったと口々に感想を口にしていた。
キャンプを実施してみて、異年齢の子どもがたくさん集まったことで、普段の生活の中で

の立ち位置から離れ、様々な関係性の中で過ごすことができたことや、日常生活では体験できない多くの経験を積むことができたことは、子どもたちにとって非常によかったと感じている。

「生きる力」を育むためにはコンフォートゾーン（居心地の良い場所）から一歩踏み出してみることだと考えており、今回の経験ではそうした体験をすることが出来たと感じている。

「学び」は興味・関心のあることを突き詰めていく先にあると考えている。その過程で出来なかったこともなぜ出来なかったのか考えることも学びであり、成長につながっていく。

今後もこうした体験機会を実施していきたい。

（副委員長）

意見や質問、感想はないか。

（委員）

とてもよい体験を実践されていると思う。宿泊体験はたくさんのことを学べる非常に有効な手段だと思う。

（委員）

普通は「学び」を事業として捉えてしまいがちだが、子どもたちとの距離感なども含め、非常に参考になる取組をきくことができありがたい。

（委員）

自分の娘が夏にイングリッシュキャンプに参加したが、キャンプの前後では子どもの成長が感じられる。おそらく参加された子どもたちの保護者も同様ではないかと思う。コロナ禍だからこそ、こうした体験で得られる学びの重要性を強く感じている。

（委員）

うまくいかないことを楽しんでいると感じた。「学び」という概念に縛られすぎない取組が非常に素晴らしい。学校ではないところで行う取組の良さが垣間見えた。

（10 分休憩）

（副委員長）

続いてＮＰＯ法人土佐山アカデミーの活動について報告をお願いしたい。

（ＮＰＯ法人土佐山アカデミー吉冨氏）

平成 29 年度から令和２年度まで、子ども地域推進事業として県と委託契約を結び、「森の子ども会議」（名前の由来は香美市の「香美市子ども会議」が基となっている）を実施した。

プレ事業となった平成 29 年度と本格的に事業展開をはじめた平成 30 年度は中部地区で開催し、平成 31 年度（令和元年度）は東部地区、令和２年度は西部地区と、県内全域で開催した。

地域の課題を教材として、子どもたちが主体的に課題解決のために考えたり、関係性づくりなどを学んだりし、リーダーシップを身に付けて欲しいと考えていた。また、県外に出て行ったとしても、そこでたくさんの知識や経験を身に付け、ゆくゆくは高知に戻ってくる戻り鰹のような教育をしてみたいと考えたところから事業を開始した。

土佐山アカデミー方針の中に「越境教育」がある。様々なしがらみという枠を越えたところに学びがあるという考え方であり、それに基づいた取組を行っている。

「森の子ども会議」は、１年目は大人が中心として事業を運営しているが、２年目には大学生スタッフにサポートに入ってもらい、３年目には大学生が中心となって事業をまわしている。さらに４年目には、３年目に中心となっていた大学生もサポート役にまわり、新しい大学生が運営の中心を担当している。このようにすることで、段階的にリーダーシップが身に付いている。

キャンプは身近な非日常体験を経験できる機会である。子どもたちは非日常体験を経験することで、今まで自分の信じていた価値観などにさまざまな刺激を受け、その中で多くの気づきや学びを得ることができると考えている。

３年目までは泊を伴わなかったが、４年目となった今年度は松葉川キャンプ場で宿泊を伴うものを予定していた。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の拡大もあり実現できず、日帰りでキャンプ場に集まり、体験活動をする形となった。

最後に、活動の様子を YouTube で発信した。

（委員）

４年間という長期間継続した取組ということがすばらしい。

大学生と接するうえで大切にしていることなどはあるか。

（ＮＰＯ法人土佐山アカデミー吉冨氏）

まずは思うようにやらしている。しかし、自由にやらしてみた結果、うまくいくこともあれば失敗することもあるので、失敗する時間をつくっておくことを大事にしている。

（委員）

自身と学生との関わりの中では、学生に覚悟を決めさせることに苦労した経験がある。覚悟を決めさせることは納得させるという意味であり、学生に納得させることができたとき

は、すごい力を発揮するのだが、そこに至るまでがなかなかに難しい。なので辛抱強く接することが非常に重要と考える。
　学びを言語化させることで、経験を学びとして子どもたちの中に留めることができる。土佐山アカデミーの取組はそうした学びの本質をうまく活動の中に取り組んでいると感じた。

（副委員長）
　最後に高知県青年団協議会の活動について報告をお願いしたい。

（高知県青年団協議会森岡氏）
　高知県青年団協議会として初めての取組となる、高校生を対象としたキャンプを 11 月に実施した。高校生 13 名と林業大学校の学生１名、高岡高校の教員１名が参加した。
　以前夏祭りの運営に高校生が参加してくれた際、高校生に触発されるかたちで青年団員が成長するという経験があった。また、青年団の活動に触れた機会のある子どもたちが成長し、青年団に入るというサイクルにつながるきっかけになって欲しいという考えもあり、今回の事業を計画した。
　募集に際しては、事業の趣旨説明以前に、団体の説明から必要になる場面もあり、大変苦労した。しかし、チラシにＬＩＮＥのＱＲコードを載せるなどしたことで、少しずつ参加者を増やすことができた。
　四万十市で自伐型林業に従事されている方のもとを訪れ、参加者には、日中は林業体験をしてもらい、夜は「カタリバ」を実施した。
　特に「カタリバ」では、高校生にとっては初対面の人と語り合うことは新鮮に感じられたとの感想も多く、非常に有意義な経験の場を提供することが出来たと感じている。
　これからは他団体等とも連携しつつ、こうした事業の展開を続けていきたい。
　普段できないような体験機会を提供することは子どもたちにとっても非常に大切なことだと考えている。

（副委員長）
　若者世代がさらに次世代を担う子どもたちを育成していくという取組に非常に夢を感じる内容に思えた。
　報告を受け、質問や意見等はないか。

（委員）
　若い世代の取組を心強く感じる。高齢化など課題は様々なところで付いてくる問題であるが、そうした中だからこそ、こうした青年団の取組を継続していっていただきたい。
　事業を始めるうえでのノウハウは必要だと思うが、ノウハウに固執しすぎると見通しを立てがちになる。青年団の取組のように「まずはやってみる」ということはとても面白くて、

失敗することやつまづく瞬間はあると思うが、そこが一番育つ瞬間でもあると思う。

（眞鍋氏）
「カタリバ」のときの子どもたちの様子について伺いたい。

（高知県青年団協議会森岡氏）
初対面の人が多い中での語り合いのため、きっかけをつくってあげることは大人が仕掛けるようにした。失敗経験などを自ら話すことで、高校生たちも次第に緊張がほぐれ、段々と話してくれるようになった。

（委員）
３名の方々の報告を聴いて、まずは子どもたちにやらせてみる、大人は見守る、ということの大切さを再確認した。
「つなぐ」ということは非常に重要。報告者の方々の直接的な触れ合いを伴う活動からも、様々なつながりが生まれている。リモートによるつながることも可能とは思うが、そういう世の中だからこそ、直接的な触れ合いから生まれるつながりが大事になってくると思う。
報告を受け、社会教育のすばらしさを感じた。

（委員）
世代間がつながっていくことの大切さを感じた。そうした場をこれからも作っていきたいと思う。

３　令和３年度生涯学習課予算について（11:20～11:25）

４　閉会
生涯学習課長挨拶